



# 日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

November 2014  
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 48 no. 6

Published by JAIP 1-32-5 U.S.P Higashishinagawa Shinagawa-ku, Tokyo 140-0002

Call:03-5479-7269 e-mail:office@jaip.jp

## 理事会報告

2014年9月30日(火)

出席：土方理事長、グレシヤム副理事長、相澤理事、松村理事、小松崎理事、細谷理事（河村委員長、事務局）

### 1. 会計報告

事務局から9月末現在の報告（半期・見込）があり、概ね予算内で推移しているとして承認された。

### 2. セミナー等の開催予定策定

河村総務委員長から今まで総務委員会及び理事会で提案のあったセミナーの内容が報告され、討議の結果、細谷理事が日本酒造組合中央会で調査した（仮称）「日本の酒文化」を60名規模で行う事とし、詳細は総務委員会で詰めるよう委任した。

また、他の候補としてあがった女性の働き方やワーク・ライフ・バランスについてのパネルディスカッションについては引き続き検討することとした。

消費税関連は実務を含め総務委員会で詰めることとした。

### 3. 役員選挙に向けて

選挙日程から年内に選挙管理委員会を立ち上げる事とした。委員長、委員の選出、交渉は事務局が行う。

### 4. 理事長から

委員会報告

・文化・厚生委員会：関西パーティーには12社、38名の参加があった。

11月にボウリング大会を行う。ピリヤードについては検討中。

・事業委員会：新たに書協のネットバーゲンに参加する。

・文教：国会図書館関西館の見学会は13名の参加があった。

### 5. その他

・OECD日本事務所の入会審査を行い、正会員として承認された。

・ビューロー・ホソヤで試作された個人会員募集のチラシは細部を修正の上、活用する。

・次回の理事会は11月4日(火)に行う。

2014年11月4日(火)

出席：土方理事長、グレシヤム副理事長、山川理事、相澤理事、松村理事、小松崎理事、細谷理事（河村委員長、事務局）

### 1. セミナー等の開催予定策定

前回の理事会の決定を受け、河村総務委員長が講師の候補の方と面談した内容の報告があり、以下の通り行う事とした。また詳細は総務委員会で検討する。

・講師：平出淑恵（ひらいでとしえ）氏

・仮題：「日本酒を通じて 世界に発信しよう 日本の文化」

・開催日時：2015年2月10日午後4時30分～午後7時

・場所：丸善9F会議室

・定員50名

・会費：3～4千円（試飲会込み）

・講師謝礼10万円

・別途5万円程度の補助が必要

### 2. 役員選挙に向けて

事務局からワイリー・ジャパンの長谷氏を委員長とした選挙管理委員会が発足した旨の報告があった。第1回目の委員会は11月17日に行い、来年2月の役員決定までの日程等を討議する。

### 3. 委員会報告

本日本行われた理事による座談会は会報新年号に掲載する。（山川担当理事）

### 4. その他

日本出版貿易(株)から退会届が出され、理事長から中林氏との面談内容が報告された。

討議の結果、承認は保留する事とした。

# Frankfurt Book Fair 2014報告

2014年10月8日～12日、今年もフランクフルトブックフェアが開催されました。例年、会期にあわせてフランクフルトに入られる方が多いと思いますが、今年は日本列島を席卷した台風の影響を受け、いかに苦勞して到着したかをまずは報告し合うことから会話がはじまる、そういうフェアとなりました。私も、予約していた直行便が出発前日早々に欠航が決定、その日のうちにロンドン経由を押さえたうえに念のため代表で成田前泊をして臨んで一安心していたのですが、当日朝にはそのロンドン便の出発が大幅に遅れることが判明、それでは経由便に間に合わないかと右往左往した結果、成田空港で5時間足止めされつつ最終的に決まったのがフィンランド・ヘルシンキ経由で、現地一泊ののち翌日午後のフランクフルト便。つまり、予備知識も何もない北欧に投げ出され、一泊して来いということでもう調子はずれなスタートとなりました。

フィンランドといえば今年をご存じの通り「ムーミン」の作者トーベ・ヤンソン生誕100周年にあたり日本国内でも各地で催し物が行われていますが、現地の博物館や国会図書館関係施設でも展示会のポスターが目につきました。現地の書店視察報告でも詳述できれば格好よいのですがなにぶん事前のインプットもなく時間も限られていましたので、漫ろ歩いて冷たくも澄んだ北欧の空気を吸って過ごした次第です。

かくして漸くたどり着いたフランクフルト、奇しくも今年のGuest of Honorはそのフィンランドで、短時間滞在するだけでは実感出来るものではありませんがデータによれば出版物の83%が母国語オリジナル（つまり翻訳ではない）という特徴をもつらしく、また興味深いのは、年間の刊行点数10,000点、これがヨーロッパで人口一人当たりの出版物が最も多いという計算になるそうです。

さて、メッセ会場ですが、今年は、例えばInternational Publishersが集積するHall8で例年ブースが並んでいたレーンの一角が敷居で区切られ空き地になっているところがあり、また人混みも例年ほどではないとの印象をもったのですが、閉会直後の公式データでもtrade visitorが140,291名で前年142,921名から2%の減少、一般客も昨年の275,342名から269,534名と2.2%の減少とのことでした。目にした印象ではもっと減っているように思いましたが、各社経費節減の為か例年よりブースを小さくしているケースもあり、またある大手出版社の方も、実は毎年のように社内で派遣人数の抑制が議論されているといったことも仰っていました。いずれも変わらぬ、経費節減の影響はありそうです。

いずれにしても、例えば2009年のtrade visitorは152,530名、これはリーマンショック直後の数字ということになりますがここを起点にした減少幅は6.9%という計算で、ブックフェアの見解では今年は「減少幅を最小限にとどめてい

る」と評価され、その原動力はやはりベンチャー系のtech-based innovatorつまりデジタル化対応の新規事業を目論む新興企業の存在ということのようです。事実、小さなブースで出展しているベンチャーが集積するコーナーは相対的に活況を呈していました。

そしてもうひとつ、減少トレンドを示す各種データのなかで上向きになっているのが絵本・児童書・ヤングアダルトの出展社数だそうで、これも当然、デジタル化あるいは新しいコンテンツ流通のインフラ構築の動きと足並みをそろえた動向を見せることは間違いないところではありますが、なにはともあれコンテンツを創る側にポジティブな動きを垣間見られるこのデータには、少し安堵した気持ちになったことは否めません。

デジタルや情報技術と不可分のビジネスである学術出版・流通にあっては、会期中に商談をする相手も年々変質してきていますが、今年はSwetsの件での対応に版元も代理店も追われる状況があり、その間STMのような業界団体が迅速な動きを見せて業界として一定の対応方針を示し、あるいは実利的な善後策を打つ、健全な姿を垣間見られたというのは私感としても、業界として事業モデルの変革の要待ったなしといったところということは言及するまでもないかと思えます。

増税、円安、予算減のトリプルパンチで例年以上に緊縮の色を深める日本市場を相手にビジネスをする出版社において売上下落は例年以上に大幅なものとなっているところが多数派のようですが、実態としてまだまだ過渡期としか言いようのないいまの事業環境にあって、いち早く流通モデルを標準化する、一方では既存の事業の収益を少なくともその間下支えする、その成否が優勝劣敗の分け目となるわけで、Swetsの件もその文脈で議論されることにもなるかと思われませんが、もうひとつ、複数の出版社が宣言していたこととして、やはり流通させるべきコンテンツをきちんと創り、そこに価値を置いて提供していくことの大事、これは極めて基本的でありつつ、ややもすればウェットに解釈されうることすらあるかも知れない昨今ですが、流通モデルの変革と併せ業界に関わる者であれば決して忘れてならないことを敢えて（改めて）口にしはじめた人々に遭遇したとき、シニカルに言ってしまうは「改革疲れ」、素直に受け取れば「原点回帰」を感じ、私個人としては後者の想いを共有しつつ、コンテンツを大切に扱う改革、是非ともこれに、今後とも携わっていきたいとの想いを新たにフェアを終えて帰国しました（ところ、また台風が来ていました）。

（丸善株式会社 讀井裕二）

# 国立国会図書館関西館見学レポート

## 1、見学概要

施設名：国立国会図書館関西館

所在地：京都府相楽郡精華町精華台8-1-3

日時：2014年9月19日（金）14時～15時

## 2、見学目的

国立国会図書館関西館館内を実際に見学することで、東京本館と対であり、高度情報化社会に対応しうる関西の電子図書館としての概要（役割・設置目的）、及びその機能・特徴を知ることが目的として参加した。

## 3、見学内容

- ・エントランスの見学
- ・事務室、閲覧室内の見学
- ・書庫内の見学

## 4、考察

今回、国立国会図書館（以降、関西館）の見学の機会をいただき、京都府相楽郡精華町までうかがった。

周囲に民家やオフィスなどは少なく、幅のある道路が行き交う広々とした街並みであり、その中で、関西館はモダンでシンプルな外観ながら、強い存在感を放っていた。国内有数の蔵書規模を誇る同館の敷地は広く、自動で芝生を刈る大型の機械など、目を引くものも多かった。

見学は、エントランス部分から、閲覧室を通り、書庫に降りていくという道筋で行われた。

壁面のガラス張りが目を引くエントランス付近にて、まずは特徴的な関西館の建物そのものについて解説をいただいた。

関西館は、1996年に実施された国際建築設計競技において、493作品（国内274作品、国外42カ国219作品）の中から採用され、設計者である陶器二三雄（とうきふみお）氏により着工されたとのこと。多数の応募があった国際コンペであり、同館建設に対する国内外からの関心の高さがうかがえる。さらにお話をうかがっていくと、関西館の正面に位置する民間経営の総合スポーツクラブも陶器二三雄氏による設計とのことで、景観を損なわないようにと氏が申し出たという話は、設計者の強い思い入れを感じるエピソードとして感じ入った。

エントランスから閲覧室に向かって地下に入っていくが、地下ではあるものの、両側のガラス壁面を通して、吹き抜けになっている中庭を望むことができるようなつくりになっていた。中庭に差し込む太陽の光と植えられた植物の緑によってまったく暗さを感じさせない空間になっており、ぱっと見たところとても地下に居るとは思えない場所だった。中庭の直下には書庫があるはずなので木が植えられているのは奇異に感じられたが、植えられた樹木の根はワイヤーによって横方向に固定されており、真下の空間を書庫のために確保しているのだとうかがった。まさしく水面下で様々な工夫が凝らされており、ところどころに見られるこういった

点が、まさに、設計競技の審査講評にもあった「控えめな新鮮さ」と感じられた。

閲覧室に向かう途中、思いがけなかったのは、柱などが白い漆喰を使ってできていることだった。その素材感のためか、太陽光の反射の加減が独特で、そこそこにやわらかく静かな空間がつけられていた。

閲覧室は広くブラウンの基調で、ここも無機的ではないやわらかさのある空間になっていた。東京本館に比べた関西館の特徴としてアジア関係の資料が充実しているということで、アジア資料室と呼ばれるエリアの所蔵図書だけで30万点を超えると知り、驚いた。以前ある東洋史の研究者が、家は遠いのだが関西館によく出向く、と話されていたのを思い出し、なるほどと得心がいった。

書庫内へ進むと、これもまた大変な奥行きがあり、書架が果てしなく続いているような印象を受けた。納められている資料は、書籍雑誌を扱う業界にあってもなかなか目にする機会の無いようなものも多く、収集の規模感と幅広さをうかがわせた。地下書庫の一部は吹き抜けになっており、約140万冊の収蔵能力を持つ自動書庫が設置されていた。自動書庫はバーコードで管理された資料がコンテナ単位で呼び出され、天井付近のあちこちに設置されたレールを通過して移動する仕組みになっており、静かな書庫の中で、赤いコンテナが閲覧室と書庫とを行き来する音だけが聞こえる様は大変印象的だった。

進むほどに資料の量に圧倒され、本の森に迷い込んだような感覚になったが、このペースで収書が進めば近い将来キャパシティを超えてしまうとの由、新たな建物を建て、書庫を増設する計画が進んでいるということだった。増設によってさらなる資料の充実が図られると思う。予定されている計画がどのように進むか目が離せない。

外はまだ少し夏の暑さを残すような気候だったが、建物内部の空気は意外なほどひんやりしていた。資料保存のため、温度22℃、湿度55%で保たれているとのことだった。消火設備は資料の保存のため水を使わず、設置されているスプリンクラーからは窒素ガスが排出される仕組みになっていた。いずれも、人よりも資料の保護を最優先する考え方で、「国立国会図書館」という施設の位置づけや意義を示しているように感じられた。ちなみに、スプリンクラー作動後、一週間が経過すれば立入り可能だが窒素ガスの影響で軽い高山病のような症状が報告されるとのこと。後になって、東京本館も同様のかたちであると耳にした。資料のためにも人のためにも、火災など災害に見舞われることのないように、と感じた。

以上、見学の報告です。

今回の見学に参加できて、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。開催にご尽力いただいた洋書協会関係者の方に感謝いたします。

（丸善株式会社大阪支店 南 貴裕、嶋中 郁恵）

## “坂の上の雲” 英訳版日本翻訳出版文化賞授賞

過る 2008 年に着手しました司馬遼太郎の著作、“坂の上の雲”の英語訳刊行プロジェクトは、昨年末に完結しました。当企画の発想から刊行を目指す作業の経緯は、会報の 2013 年 1 月号にその詳細が掲載されて居ります。

比度、図らずもこの“Clouds Above the Hill”が本年の日本翻訳出版文化賞授賞の榮譽に浴しました。6 年余に及びました翻訳、編集作業の労苦が報われた想いで感慨一入です。

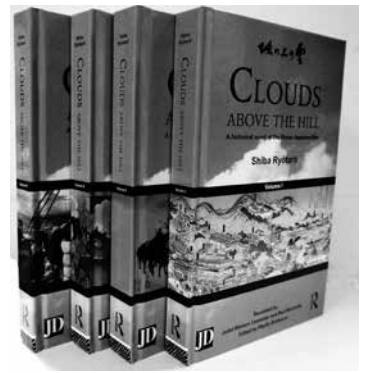
余談ですが、遡る 2001 年に上梓しました“Twakura Embassy 1871-73”、(米欧回覧実記の完訳英語版)を目にした Donald・キーンさんからは私宛の手紙で、“欧米の多くの日本学者間で、米欧回覧は膨大な国家予算を費やして明治政府要人が行った大名旅行に過ぎないとの共通認識は、この英訳書の出現で覆り、実は日本が国の近代化を目指し叡智を結集して挙行した視察旅行を通して得た成果がやがて編纂刊行された貴重な歴史資料である事を改めて気付くに違いない。”と申して居ります。私はこの氏の評価に力を得て次の英訳出版企画として、司馬さんのこの雄大無比な日本の明治期の国情と、青雲の志を抱いて活躍した数々の群像を克明に描いた大作を選択、全力で事業に取り組んだ次第です。

幸い、洋書輸入配給事業に専心従事した私の 45 年のキャリアを通して培った出版の know-how と欧米出版人との交流で築いた人脈を有効に活用する事で、日本の出版文化の真髄を広く海外の識者に向

け発信し、更なる日本理解を求めている出版事業に専心して今日に至っております。

実は、UPS の事業経営の職務を辞して後、寛ぎの余生を過ごすことも考えましたが、やがて立ち上げました日本文献出版が今や私の第二の人生の基盤となりました。生涯現役を念頭に翻訳出版活動を中心に幾分かの社会貢献が果たせれば幸いと日々を過ごす昨今です。

(日本文献出版、社主 齋藤純生)



コピーライトは日本翻訳家協会

## 2014 年度関西懇親パーティー

今年の関西懇親パーティーは 9 月 19 日(金)に大阪第一ホテルにて開催いたしました。

12 社 38 名と昨年同様大勢の方にご参加いただきました。

先に行われた国会図書館関西館の見学会に参加された方も合流し、河村総務委員長の司会により、先ず細谷担当理事の開会の挨拶、続いて玉方理事長のご発声で乾杯、懇談・情報交換入りました。

久しぶりの再会の方も多いうで食事を楽しみながら

会話が弾んでいました。サマーパーティーの様な大規模な会と違い、少人数ですので出席者全員とお話しが出来、より親密な関係が築けたように思えました。またいくつかの商談も纏まったようです。中締めは(株)極東書店大阪営業所の橋本様にお願いしました。突然の指名にもかかわらず、立派なスピーチをされたのはさすがが極東書店の営業マンと感心した次第です。

来年もまた開催いたしますのでご参加のほどよろしくお願いたします。

(M.S. 記)

# Charleston Conference に参加して

2014年11月5日～8日、米国サウスキャロライナ州チャールストンで開催された第34回Charleston Conferenceに参加した。

Charleston Conferenceは米国のアカデミック図書館員の集会で、毎年同じ時期に同じ場所で行われている。図書館の課題共有のための場として少人数で発足したが、年々参加者が増え今年は1,600人がエントリーしている。また、出版者、システムベンダー等の業者も多く参加している。参加者にとっては、新商品や新しい知見・情報を得る、課題や解決方法を共有する、仲間に会う、など様々な目的を同時にこなすことができる貴重な場として機能している。この点は日本の図書館集会も同様と思われるが、内容の濃さ、スケジュールの過密さ、規模の大きさ、そして参加者の情報収集に対する意欲は日本の同様のイベントを上回ると感じた。メイン会場の老舗ホテルFrancis Marionのみでは会場が足らず、周辺の別のホテルや大学図書館など計4か所での開催となり、セッション間の短い休憩時間を利用して数か所を忙しく渡り歩いた。

運営資金の多くを業者の出資に頼っていることもあるが、業界の一構成員として図書館員らと対等かつ協力的な関係・立場で参加している。展示や発表の場が用意されているのは日本の同様のイベントも同じだが、事例報告や研究発表を図書館員と業者が共同で行うのは日本では見かけない光景と思われる。

4日間にわたって行われた200以上のセッション（講演や討議など）では、近年の学術図書館に関わる様々なトピックが発表、議論された。中でも関心の高いテーマの一つとして、教科書のオープンアクセス化など学生のコスト負担の増加を救済する様々な試みについての概要を報告したい。

SPARCの調査によれば大学での教材や授業料の費用は年々増加し、2013-2014年の2年間で物理学系の学生の

一人当たりの教材その他の資料のコスト負担は平均1,207ドルとの調査結果がある。高額な教科書・研究教材のコスト負担に苦しむ学生は教材を買わない、履修する授業を減らすなどの非建設的な対応をせざるを得ない。このような状況に対し、商業ベースではプリント版よりもコストを抑えたオンライン教科書の提供、貸し出し用のレンタル教科書、中古の教科書の売買を行うサイトなど様々な選択肢が提供され学生を支援している。また、近年ではOpen Educational Resources (OER) と呼ばれる無料の教材、授業の普及に対する支援が始まっている。無料で閲覧、PDFダウンロード、少額での印刷版販売などを提供する非営利機関により運営される教材提供サービスのほか、大学の授業を補完する目的でオンラインで提供される高品質な授業などを州政府の支援で提供する活動が紹介された。また、大学単位で構築されたこのようなリソースを広く公開し、他大学の学生にも共有する動きや、学生だけでなく機関側のコスト削減を支援するためにオンライン授業の作成をサポートする機関もいくつか出てきている。

このようにIT技術を駆使した様々な解決策が商業ベースだけでなく非営利機関から、そしてこれらの取り組みを財団や公的機関が積極的に支援、出資する枠組みは米国の学術業界のみならず米国社会の強みであり、社会や経済、文化の発展の強力な原動力になっていると思われる。

Charleston Conferenceとはこれら学術業界の現状や新しいアイデア、イノベーションに関する情報をワンストップで収集でき大変有意義な場であることがわかった。今後も変化と発展を続ける業界の行方を予測し、把握するためにも引き続きここから発信される情報に注目していきたい。

ユサコ株式会社

リサーチ・アシストグループ 加藤博之



セッションの様子



サブ会場の Courtyard Marriott ホテル

よりよいコンテンツを世界から。 ユサコは学術書コンテンツとソフトウェアの  
プレミアムセレクトショップです。

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**jove**  
JOURNAL OF  
VISUALIZED EXPERIMENTS

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**ASCO**  
American Society of Clinical Oncology

HENRY  
STEWART  
TALKS

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**REPRINTS DESK**  
The Content Workflow Company

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**ENDNOTE**

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**American  
Diabetes  
Association**

赤崎勇 教授 天野 浩 教授 中村修二 教授

ノーベル物理学賞受賞  
おめでとうございます。

日本の学術情報に貢献する、ユサコです。

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**ENDOCRINE**

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**Web of Science**

**ExLibris**  
The bridge to knowledge

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**J  
STOR**

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**American  
Psychiatric  
Publishing**

**USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

**PNAS**  
www.pnas.org

**-USACO**  
PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

創業 1950  
ユサコ株式会社 <http://www.usaco.co.jp/>  
〒106-0044 東京都港区東麻布 2丁目17番12号 TEL 03-3505-6161 FAX 03-3505-6281

日本洋書協会会報 vol.48 No.6(通算531号) 発行日2014年11月1日 編集者 平野 覚

発行所 日本洋書協会 〒140-0002 東京都品川区東品川1-32-5 U.P.S. 内 TEL 03-5479-7269 FAX 03-5479-7307

URL:<http://www.jaip.jp> E-mail:[office@jaip.jp](mailto:office@jaip.jp)